

心理療法と超越性の弁証法 (2007年度 公開シンポジウム報告 心理療法と超越性 - 神話的時間と宗教性をめぐって)

著者	河合 俊雄
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	9
ページ	15-20
発行年	2008-02-15
URL	http://doi.org/10.14990/00002632

心理療法と超越性の弁証法

河合 俊雄

京都大学こころの未来研究センター教授。ユング派分析家。元甲南大学文学部社会学科助教授。哲学的思想を背景に持ちながら、心理療法の研究を重ねている。著書に『概念の心理療法』（日本評論社）、『心理療法の理論』（岩波書店）など。

今日はこのようなシンポジウムにお招きいただきまして、ありがとうございます。けれども、実は今日、私は参加するつもりはなかったのです。一昨日、昨日とカウンセリングは全面キャンセルしました。今日も甲南大学から連絡があったら、「誠にすみませんけれども、お断り申し上げます」と言うつもりだったのです。しかし、何の連絡もないので、しょうがないから来ました。（会場笑）

出だしから非常に超越とはほど遠い話でしたが、今日は、以前に研究会（当研究所・第三五回研究会「心理療法における超越 超越の不可能性と現実」）でお話したのとは違う話をします。超越の弁証法について、二種類を考えてみたいと思っています。

超越の概念というのは非常に難しいですね。「超越」っていったい何だろう。これを言い出すと非常にややこしいので、多少整理していく必要があると思います。

宗教学者の中沢新一が『僕の叔父さん 網野善彦』（集英社新書、二〇〇四年）という本を書いています。網野善彦という歴史学者がいるのですが、その人が中沢新一の叔母さんの夫なのです。この本は、二〇〇四年に網野善彦が亡くなったときに、連載された追悼文をまとめたものです。

この中に、『トランセンデンタル』に憑かれた人々」という小見出しがあります。トランセンデンタル Transcendental（超越）。われわれは超越にいろいろなイメージを持っていますが、西洋の思想史の中で考えると、ドイツ観念論の影響がすごく大きいと思います。中沢新一は、超越というのは「経験に先んじている」「経験が触れることのできない」ことだと言っています。

カントの哲学では、対象（世界）の存在を前提としてその真の姿を認識しようとするそれまでの哲学とは違い、主観の認識活動が対象を構築すると考えています。そして、その認識が成り立つための条件として経験に先んじるカテゴリーといった主観の側のものを問題にしたわけです。だから、そういう意味でカントは超越論的と言ったのだと思います。そのことにも触れつつ、中沢氏は、「経験に先んじる」「経験が触れることができないうもの」を超越と言っています。そして、それは現実の五感による影響や、経験から自由な領域で、そのような自由な領域を持つのが人間の本質なのだと書いています。この点は非常に面白いと思います。

せっかく網野善彦を出したので彼に沿いながら、もう少し具体的に超越とは何かを考えてみたいと思います。今日は一

般の方も多いので、手に入りやすく読みやすい本を紹介しします。『日本社会と天皇制』（岩波ブックレット、一九八八年）というブックレットがあります。三〇分ぐらいで読めます。この中で網野善彦は、単一国家として日本が統治されていること、新嘗祭に象徴される稲作文化や稲作儀礼を中心とする天皇制への疑問をずっと考えています。

その中で、非常に面白いと思いますが、遊女のことには触れています。少し下世話な言い方をすると売春婦です。昔の意味はもつと違ったんですが、そして非人。非人とはどういうものかというのと、いろいろな警備や刑を執行する人、それから汚れを清める人です。網野善彦はさまざまな絵巻を見ながら、そういう人のことを取り上げます。そして、鎌倉時代までそういう人は差別されていなかった、むしろ神・仏、天皇のような聖なるものに直属する人々であったと述べています。だから、むしろ畏れとか敬われる存在だったわけですね。

網野善彦だけではなく、民俗学者の柳田国男も同じようなことに関心を持っていました。その柳田国男の仕事は、最近民俗学者の赤坂憲雄がいろいろな形で取り上げています。柳田国男は、一般の町村に住む人々を指して「常民」と言っており、稲作を中心とした統一的な日本文化を強調したと考えられています。しかしその一方で彼は、あちこちを定住せず動く人、山に住む人々に非常に関心を持っていたことがわかっています。山に住む人々とか、またぎであるとか、乞食であるとか。また、被差別部落の問題についても関心を寄せていました。

最初に西洋の超越概念ということから始めましたが、日本における超越を考えると、定住民から排除された人々が聖なるものに関わると言えるのではないのでしょうか。

日本における超越をもう少し考えてみたいと思います。超越の座標となるものを考えてみると、日本には村というものがあって、その周りやその上に山がある。そういうコスモロジーは大事だったのではないかと思います。私が大学時代によく読んだ高取正男という民俗学者がいます。彼が書いた『民俗のこころ』とか、『宗教以前』とか、『仏教土着』という本にも、村と山のコスモロジーの話がよく出てきます。今日ご出演の垂谷先生とは、在学の頃にこういうことで議論したことを覚えています。

一般的には、日本の村の共同体は、非常に強い力を持っているイメージがあると思います。村八分とか、村のしきたりということを考えても、個人が埋没した集団であって、縛りがきつい、みんな同じでないといけないといった印象をお持ちかもしれません。ところが、高取さんの本を読んでいると、非常に豊かな世界であることがわかります。たとえば、家の中を見ても、ありとあらゆるところに神様がいます。かまどの神様とか、トイレの神様とか。ありとあらゆるものに神様が宿っている。「一寸の虫にも五分の魂」と言いますが、どのようなものにも魂が宿っている。非常にアニミズム的な世界観を持っているわけです。だから、そういうところに基づいて日本人はものを大切にしていたし、もったいないという気持ちも持っていたわけです。そして、それぞれの魂を大事に

することの中にタブーがあった、というのが高取さんの考え方です。お針箱の中をのぞいてはいけなとか、他人のお茶碗を使つてはいけなとか、いろいろなタブーがあるわけです。そういうふうにして村は非常に豊かな世界をつくつていました。

ところが、飢饉になると村が離散してしまいます。村中が流浪して、山に入ってしまうのです。そうすると、村という世界は絶対ではなくなります。そのため、それを越えた世界があるという世界観を、みんなが持っていたと思います。そのとき超越のイメージとして出てくるのは山ですね。村社会の道祖神、辻というのはこの世とあの世の境になる。だから、どうしようもなくなつた人が蒸発して山に入るといふことが昔はあつた。そういう心性から、今も蒸発が起こってくるんではないかと言えると思います。高取さんは、このように共同体が行為を通じて超越を知っていたからこそ、日本に仏教が根付いたのではないかと述べています。

この中で、私が注目したいことは二つあります。一つは、山です。最初に中沢新一を引いて、超越とは経験が触れることができないものだと言いました。山というものは目に見えます。山というのは村から見ると周辺、高いところにあります。つまり、超越がイメージになるのです。超越の座標となる。そうした座標も大事なのではないかと思ひます。

もう一つは、聖なるものです。聖なるものは単にすばらしいものとか、最高のものではありません。神とか仏とか極楽とかそういうものだと同時に、同時に最低のものであ

るのです。非常に否定的なものであるということです。今取り上げた遊女、非人とか、被差別部落などがそうです。それから、高取さんの話に出てくるような、一家離散してしまうとか、餓死してしまうとか、死んでしまうとか、狂つてあるいは村を飛び出していくとか、そういう否定的なものが超越に関わっています。そして、それには必ず「死」というものが関係しています。そういうところに超越性の弁証法が認められます。つまり、最高のものと最低のものが同時にある。そのあたりが心理療法における超越に関係しているのではないかと思うわけです。

次に、心理療法における超越というところに入っていきたいと思ひます。心理療法は、クライエントが抱えている問題とか症状に関わっているわけですね。先ほどの横山先生のお話でも、自傷であるとか、自殺未遂であるとか、初めて聞かれる人は、本当にぞつとするようなことが次々と出てきます。われわれが臨床で接する問題でも、学校に行けないとか、気分が落ち込んで動けないとか、電車が怖くて乗れないとか、ともかく否定的なものです。

けれども、先ほどからお話しているように、これだけ否定的であるからこそ、これだけ悲惨であるからこそ超越に関わると言えると思うのです。たとえば乞食であるとか、非人であるとか、家をなくして流浪する人々であるとか、死に直面している人は、それこそ超越に関わります。ジェイムズ・ヒルマンが、症状の中に魂があると言っていますが、それに倣つて言うると、症状の中にもこそ超越があると思ひます。あるい

は、症状や問題行動は超越を求めての結果と言えると思います。

ここで問題として触れておきたいのは、超越に対する非弁証法的な関わり方です。一つは、現在強くなっていると思われる、症状や問題行動を一面的にマイナスのものとして考えるあり方です。学校に行けなかったら行けるようにしたらいい。リストカットなどの自傷行為をしたら、それが治まればいい。むちゃくちゃに食べる人だったら、コントロールして食べるようになればいい。つまり、マイナスのものを取るということが心理療法だというのは、超越に対する非弁証法的な関わり方だと言えると思います。単にマイナスのものを取ってしまったらいいのだ——最近流行っている認知療法はそういう立場だと思います。

もう一つ、問題であるのは、超越を非常に美しくポジティブなものとして考えていくあり方です。心理療法を受ければ、よりすばらしい人生が開けるとか、もっと意識状態が高まっていくなか、そうした理解です。アメリカのトランスパーソナル心理学の中にもそういう傾向があると思います。それは非弁証法的な理解であると思います。そうではなくて、超越というのは常に否定性や死と関わっている。だからこそ心理療法と超越性がつながってくると言えます。

これまで抽象的な話でしたが、心理療法における超越の次元について、もう少し具体的に考えてみたいと思います。先ほど横山先生が事例を紹介されました。横山先生も私も、心理療法において夢を扱うことを非常に大事にしています。こ

こで私は、直接事例を紹介するのではなく、ある事例の夢を取り上げて、問題になっていることのエッセンスを抽出してみたいと思います。

これは研究会（当研究所・第三五回研究会）でも紹介した事例で、二〇代後半の閉所恐怖の女性の夢です。その人は大きなチェス盤の上に乗っています。チェス盤の端に来て、一歩足を踏み出すわけです。端から踏み出せば落ちてしまいきます。ところが彼女の夢の中では、一歩踏み出すたびにそこに新しいチェスの升目が出てきて下に落ちない。また一歩進むと、また新しい升目が出てくる。永遠にチェス盤の上にとどまり続けるという夢です。逆回しの動く歩道があるみたいなものです。あるいはエスカレーターを逆に進まれる感じを想像されるといいかもしれません。

この夢のチェス盤というのは何でしょうか。それは全世界であると言えます。チェスをする者にとつて、チェスの外の世界は存在しません。チェスの世界というものは完全に閉じられた一つの世界です。さっきの例えでいくと、これが村であると言えると思います。

ところが、そこに世界を越えたものがある。チェス盤の外。ハイデガーの言葉を借りれば、世界が無にさしかけられている、という言い方ができるかもしれません。それが超越なのです。このチェス盤しかないはずの世界を越したところがある。「ある」とも言えないが、そういう次元がどうしても出てきてしまう。それは、死と関わっているとも言える。あるいはチェスの上の水平的な世界ではなく、下に落ちてしまうこと

か、垂直次元の世界であるとも言えるわけです。

人間は皆、チエス盤の上を生きるしかないわけです。だんだんと年齢を重ねるとわかってきますが、たとえば、今の仕事場はひどいところだと思つて、よそに移つてもあまりよくならない。もっとひどいことがあつたりもします。人間はチエス盤の外には出られない。でも、それを狭いと思つてしまふ。そこを出たいと思つてしまふ。だから、この人は閉所恐怖という症状なのです。あるいは、この人は超越したいという気持ちを持つていて、それが症状として現れているという言い方も可能です。

そう考えると、超越を求めることが症状になることは多いと思います。たとえば摂食障害もそうです。アノレクシア・ネルボーサ（拒食）は、食べない、絶対に太りたくないというものです。ある意味、自分の身体をなくしてしまいたい。それも、自分の身体性を否定して神に近づきたいという超越性の希求かもしれない。聖フランシスコのソウルメイトとも言える聖クララは、歴史上最初のアノレクシア・ネルボーサであると言われていますが、拒食というのもある種の超越への希求があるのではないかと思います。

超越にとらわれていることが症状であるという言い方もできると思います。この閉所恐怖の人の場合、「狭い」という考えにとらわれているわけです。超越することが幻想という言い方もできます。文字どおり超越してしまつと、チエス盤から落ちてしまふ。それは死んでしまふことではないでしょうか。あるいは狂気に陥ることではないでしょうか。

ユング心理学は、昔は神話とか宗教が行なっていた超越との関わりを、個人のイメージや物語でやつていこうとする立場だと一般的には言えると思います。昔は儀式などで担われていたものです。例えば人が亡くなると四九日の間は家のそばにいて、それをあの世に見送つていく。それをずっと儀式としてやつていくのです。お線香は二本立ててはいけません。二本立てると、その人が迷つてしまふからです。事細かなルールがあつて、それをきちつと守つて儀式を行つていく。それによつて超越との関わりが担われていくというあり方だつたわけですが、そうしたものをわれわれが信じられないときに、イメージに当てはめていくのです。つまり、先ほど症状が超越の希求だと言いましたけれども、それを症状という形ではなくて、イメージで体験していこうとユング心理学は考えるわけです。

大ざっぱに言いますが、精神分析というのはある意味で超越の不可能性ということを言っていると思います。典型的には「喪の作業」が挙げられると思います。お母さんというのはいないんだ、ずつとお母さんにつながつていっていることではないんだということがわかる。これが喪の作業です。そのことによつて、初めて成長していけるのです。先ほど横山先生が、超越についての疑問を投げかけられた通り「あきらめらめるのが治療だと言えらると思います」。

多くの治療はある意味、超越からの解放だと言えらると思います。皆さんが読むことができる有名な事例が、例えば岩宮

恵子さんが書かれた岩波から出ている『生きにくい子どもたち』の中にあります。かぐや姫と同一視していた拒食の女の子の事例です。ある意味、超越と同一視していると言えると思います。ところが、彼女は治っていった、本当に普通のギヤルになってしまふ。超越から解放されるわけです。かぐや姫と同一視するという超越の考えから解放されていくことが治療だと言えると思います。

ただ、そう簡単なものではありません。ここからもう一つの超越の弁証法を考えたいと思います。単に現実に対応するとか、症状を取るのではなくて、たとえ存在しないかもしれないけれども超越のイメージを持つというのはすごく大事ではないでしょうか。あるいは超越しないということも、一つの超越との関わり方と言えないでしょうか。

さっきの岩宮さんの事例では、本当に普通の女の子になってしまいます。その女の子が最後に描いた絵が、かぐや姫の昇天です。かぐや姫になって天に昇っていく。つまり、本当にかぐや姫になってしまいます。超越から解放されることと、自分がかぐや姫になって天に昇ることが同時に成立するわけです。ある意味、不可能であることと実現すること、それが同時に成立しています。そのあたりの弁証法が心理療法で非常に面白いところだと思えます。

先ほどの閉所恐怖の人は、治療の最後のほうになって、セッション中に幽体離脱を起こしまして、はるか上のほうから私と面接している自分を見るところという体験をします。この人は、本当に普通になっていきました。それと同時に、幽体離脱と

いう形で超越していったのではないのでしょうか。

最後にまとめです。現代における超越を考えてみると、文字どおりの超越は過去のものになりつつあります。そのとき超越との弁証法的関わりが大事になってくると思うのです。超越を単純に信じたり、行動化したりしてしまうと、それは狂気とか死とか原理主義と紙一重になってしまいます。逆に、超越はない、と単純に否定するものでもありません。超越することとしないことが同時に成立することが大事だと思うのです。

心理療法が面白いのは、その両方が見えることが結構あることだと思います。認知療法を受けて治ったと思う人でも、その人が気づいたり表現したりしてくれない部分で、ある意味「裏」のことが起こっているかもしれない。超越体験をしていても、その裏のことにも心理療法家のほうで気づいていくことが大事だと思います。時間になりました。どうもありがとうございました。